

鳥取県ソフトボール協会のあゆみ

【ソフトボールのお目見え】

1945年（昭和20年）末、鳥取城跡の宿舎に駐留したアメリカ軍の将兵が、鳥取一中（現鳥取西高）の校庭で大きなボールで野球をやっていた。大きい真っ白なボール、真新しい革のグラブは、一中生の目を見張らせた。これぞソフトボールであった。

【女子の新しいスポーツ】

1946年（昭和21年）戦後の混乱期、青少年に心身の健康を取り戻すため、文部省はソフトボールを含むレクリエーション運動の講習会を開催した。岡山県での講習会に県体育会（後の県体育協会）の代表及び軟式野球連盟の尾坂雅人が参加し、普及に乗り出した。県下での講習会は、鳥取、倉吉、米子で、組織的に活動できる教員を対象に開かれ、女子の新しいスポーツとして急速に広まった。翌年には女学校の体育に取り入れられ、一般女子の間にも普及していった。10人制で、ボールは軟らかく、捕手も球審もマスクをつけなかった。

【初めての大会】

- 1947年（昭和22年）、6チームの参加を得て県軟式野球連盟の中にソフトボール部を創設し、部長に尾坂雅人が就任した。
- 第1回県女子ソフトボール選手権大会を、鳥取公設グラウンド（現県立博物館敷地）と県立鳥取高等女学校校庭（現鳥取西高第2グラウンド）で行われた。一般女子の部に米子啓成校教員、倉吉教員団、赤碕青年団、県庁若草クラブの4チーム、中学校（旧制）女子の部に倉吉高等女学校（現倉吉西高）、鳥取高等女学校（現鳥取西高）の2チームが参加し、一般女子は赤碕青年団、中学校女子は鳥取高等女学校が優勝した。
- 県総合体育大会にもソフトボールが正式種目に加えられた。

【早くも国体参加】

1948年（昭和23年）、第3回県体育総合大会兼国体予選会に女子6チームが出場。河北実高（後倉吉産高）が倉吉第二高（現倉吉西高）を破り、福岡国体に参加した。これを機に、用具、作戦、プレー等に急速な進歩が得られ県下に影響を与えた。

【鳥取県ソフトボール協会の設立】

- 1949年（昭和24年）、日本野球連盟からソフトボール部が独立し、3月31日に日本ソフトボール協会が設立された。第1回全日本選手権大会が西宮球場で開催され、暮れには日本体育協会加盟と、国体正式種目入りが実現した。
- 県内では、第1回県ソフトボール総合選手権大会が郡市対抗で開催され、東伯チームが優勝した。第1回全日本高校女子選手権大会県予選が8チームの参加で開かれ、実力伯仲、試合内容も一段と充実した。
- 年々盛んになると、運営組織の確立が不可欠なものとなり、11月には県軟式野球連盟から分離独立し、**県ソフトボール協会が設立**された。会長に浜崎敏造（鳥取市助役）理事長には尾坂雅人が就任。協会設立記念大会は、一般女子、高校女子、中学女子の3部に分けて開催された。翌年3月には県体育協会に正式加入した。

【各年度を追って】

1950年（昭和25年）

- ルール改正。10人制から9人制に変わり、グラブ、ミットの使用、キャッチャーのマスク着用などが規定される。
- 第1回県中学校女子選手権大会が郡市代表6校によって行われ、箕蚊屋二中が初優勝。
- 国民体育大会中国予選が鳥取市で開かれる。教員チームは男女混成、東伯高が中国代表権を獲得、愛知国体では準々決勝で優勝チームの兵庫高と対戦、6・7で惜敗し、全国的にも高い評価を得るとともに県内に大きな刺激を与えた。

1951年（昭和26年）

日本協会は「公認審判員規定」を定める。尾坂寛人（第2代理事長）が県内第一号「第1種公認審判員」に認定される。以降、元木重雄、西村寿行、鈴木治文、岡本純朗らが1種審判員として登場した。

1953年（昭和28年）

鳥取家政高（現敬愛高・藤井博監督）1年生エース段家美代子を擁して第8回四国国体に出場、準々決勝進出。

1954年（昭和29年）

- 米子南高（権代真廣監督）、全日本高校女子大会初出場。県内完全優勝。
- 第1回県東西対抗高校女子選抜大会、西軍が2－1で優勝。

1955年（昭和30年）

- 全日本高校県予選で、鳥取家政高の段家投手が、準々決勝戦で無安打無得点試合、決勝戦で完全試合を達成。
- 米子南高、第4回中国高校選手権大会で初優勝。
- 鳥取家政高、全日本女子選手権大会で三回戦進出。

1956年（昭和31年）

- 鳥取家政高、全日本女子選手権大会で三回戦進出。
- 米子南高、中国代表で第11回「兵庫国体」初出場。

1957年（昭和32年）

スパイクシューズが登場。底の革に滑り止めをつけたもの。

1959年（昭和34年）

第8回中国高校選手権で米子南高2回目の優勝。準決勝で鳥取家政高を破った山陽女子高を6－4で下し優勝。

1960年（昭和35年）

- ルール改正。ボール、周囲12インチ。女子に金属性スパイク。女子の捕手はマスクとボデープロテクターの着用の義務。
- 一般男子登場。全国に遅れて国体中国予選に米子地区教員が出場。
- 第15回熊本国体でソフトボール総合優勝。一般女子の興和紡倉吉（大橋忠志監督）と、高校女子の米子南高（権代真廣監督）はともに4位に入り競技別の総合優勝。女子総合で皇后杯1位。鳥取県の天皇杯20位の原動力となった。

1963年（昭和36年）

米子南高の小杉美代子（1年生）は、鳥取県において初めてのウインドミル投法をマスター

し先駆者として注目される。

1962年（昭和37年）

ユニホームに背番号着用の義務付け。1～15、監督16。

1963年（昭和38年）

- 米子南高は小杉美代子投手を擁し全日本高校選手権3位入賞。
- 倉吉教員団チーム。箕蚊屋一中・二中、米子一中・二中合同教職員チーム誕生。ソフトボール指導者を中心とするチームの結成。

1964年（昭和40年）

- 東部、中部、西部三地区の支部協会組織が整う。
- 女子の投球距離が38フィートから40フィートに改正された。

1967年（昭和42年）

技術講習会、日体大の下奥信也を講師に招き、中学・高校・一般の指導者、高校選手を対象に開く。

1968年（昭和43年）

山西敏夫（米子東高出身・国士舘大）が第1回アジア男子選手権大会に参加し準優勝、外野手としてベストナインに選ばれる。翌年の全日本大学選手権大会で優勝の原動力となる。

1969年（昭和44年）

- 男子チームが増加し7チームが登場。その後倉吉市役所チームが続いた。教員チームは倉吉教員に加えて、鳥取、東伯、西伯が加わり4チームとなる。
- 松本なつえ（米子南高出身・倉紡安城）が主戦投手として活躍、第2回アジア女子選手権大会で優勝、後に日本リーグの最高殊勲選手に選ばれる。

1970年（昭和45年）

技術部を技術強化部と審判部に分離。

1971年（昭和46年）

- 金属性バットの使用が公認され、県内でも主流となり始める。
- 第1種公認審判員の強化研修会に鈴木治文審判委員長・和田哲昭・権代真廣を派遣し、県内の指導に当たらせる。
- 第23回全国高校女子選手権大会で米子南高がベスト8に進出。

1972年（昭和47年）

倉吉東高に同好会が結成され、高校男子チームが誕生した。

1973年（昭和48年）

- 第19回全日本教員大会で倉吉教員団が土井公夫をエースに準々決勝進出。
- 福沢美恵子（旧姓朝倉・由良育英高出身）日本体育大学で活躍し、NHKスポーツ教室に出演し模範を示した。その後スポーツ指導員（現倉吉体育文化会館館長）として勤務のかたわら県内女性第一種公認審判員第1号に認定された。
- 鳥取県体育協会は第40回国民体育大会の誘致を決定。この年、日本体育協会は国体開催要項を改正し、第30回三重国体よりチーム編成は県選抜でもよいことになった。

1974年（昭和49年）

高校男子チームに鳥取西工高が加わる。倉吉東高も部に昇格、その後、米子東高、米子商高、

由良育英高、八頭高が登場した。

1975年（昭和50年）

岡本純朗強化部長を中心に三重国体を目指して高校女子選抜チーム（由良育英・倉吉北・倉吉産・根雨・米子南）を編成し（山野千草主将・米子南高・現1種公認審判員）、綿密な強化計画と指導体制の確立を図り、中国予選を突破し、三重国体に臨んだ。地元三重との一回戦、そして二回戦とサヨナラ勝ち、準決勝で惜敗。15年ぶりのベスト4進出となる。以降「鳥取方式」として知られることになり、国体に向けての強化のノウハウの手がかりとなった。

1976年（昭和51年）

日本体育協会が鳥取県が昭和60年度第40回国民体育大会開催申請県に決定。

1977年（昭和52年）

- 国体県準備委員会が設立。以後10年間、国体開催に向けて県協会の中心事業となる。高校の使用球が革ボールからゴムボールになる。
- 倉吉東高（岸田美明監督）が第12回全国高校男子大会で笠見健一のさよなら本塁打などでベスト4に入り、少年男子に光明となる。
- 大山町に成年男子チームが誕生し、後に選手たちは「わかとり国体」成年男子ソフトボール競技会場で役員を中心に成功に導く。

1978年（昭和53年）

- 第40回国体の競技会場が米子市、淀江町、大山町に決定。
- 選手強化、競技役員特に審判員・記録員の養成が急がれる。1種公認審判員80名（当時県協会に7名）の確保に大奮闘が続く。
- 国体少年男子に初の県選抜メンバー。少年女子の実績を手本に出西弘道監督で県下6高校から編成し長野国体に出場、稲毛靖投手（由良育英高）を中心に健闘。二回戦に勝ち進み地元長野に惜敗。以後の少年男子の活躍の足がかりとなる。

1980年（昭和55年）

- 国体への取り組みが全県で本格化。県協会は権代真廣を国体担当、選手強化は岡本純朗、審判員養成は和田哲昭、記録員養成は河津主明が担当。
- ルール改正で、DH制（指名打者制）、リエントリー（再出場）ルールが採用になる。

1981年（昭和56年）

- 国体テーマが「わかとり国体」、スローガンが「明日に向かってはばたこう」に決定。
- 第1種公認審判員認定会を大山町で開く。
- 打者のヘルメット着用が義務付けられた。
- 高校男子選抜が滋賀国体で県勢初の決勝進出。由良育英高、倉吉東高、八頭高から編成のチーム（河野宏二監督）は一回戦で優勝候補の地元滋賀に延長サヨナラ勝ちをし、勢いに乗った。選抜による「鳥取方式」は全国制覇も狙えると自信を得た。
- ママさん（家庭婦人）チームが8チームとなり、第1回県ママさん選手権大会を開く。愛好者の増加につながり、国体開催時の役員として、また支援体制の力となる。

1982年（昭和57年）

- 森田隆朝（県教育委員・開業医）が会長に就任。国体開催に万全を期する。
- 第1種公認審判員認定会を米子市で開く。

- 成年女子選抜（加藤修監督）が活躍。日体大のエース金口綾美（旧姓金谷・根雨高出身）を擁し、福沢美恵子を中心にした選抜チームは島根国体に出場。準決勝で地元島根に延長の末敗れたが、この種別の強化にめどがついた。
- 成年男子のクラブチームが中部地区出身者を中心に編成される。西日本大会で初優勝。

1983年（昭和58年）

- 成年男子チームは石田紙器クラブ（増井大四郎監督）として強化指定を受ける。日体大OBの稲毛靖投手（由良育英高出身）も加入し、西日本大会で連続優勝。
- 成年女子はナショナルマイクロモータを強化指定し、群馬県から平山満監督を迎えてナショナルクラブとして発足。
- 高校男子の八頭高（田村純一監督）が全国高校選抜大会でベスト4、全国高校選手権大会でベスト8と大健闘。
- 和田哲昭審判委員長が県内初の国際審判員資格を取得。

1984年（昭和59年）

- 国体リハーサル大会として、第5回全日本クラブ男子大会を大山町、クラブ女子大会を淀江町、第36回全日本一般女子大会を米子市で開催。国体強化チームが実力発揮。
- 成年男子石田紙器クラブは第30回全日本一般男子大会でベスト8に進出。
- 成年女子ナショナルクラブは全日本クラブ大会で優勝、第13回全日本選手権大会でベスト4となった。
- 特別強化コーチに中央から下奥信也氏（日体大監督）や全日本の一流選手の招聘が続く。
- 国体後に開催される身障者スポーツ大会（わかとり大会）の盲人野球競技をソフトボール協会が受け持つこととなり、諸準備が滝田哲朗副理事長を中心に会場の鳥取市で進められる。特別に複雑なルールが適用されるため研修等に精出した。
- 鳥取女子短期大学（逢坂秀樹監督）が、第19回全日本大学女子選手権大会でベスト4進出。

1985年（昭和60年）

「わかとり国体」本番の年を迎える。

- 成年女子は第6回全日本クラブ女子大会で2年連続優勝、第37回全日本一般女子大会で準優勝。成年男子も全国トップチームと善戦を続けた。
- 高校男子は倉吉東高（長谷川弘監督）が第20回全国高校男子大会で準優勝、高校女子は倉吉産高（川口志津雄監督）が第37回全日本高校女子大会でベスト8進出。
- 県外有力チームの戦力分析。岡本純朗部長を中心に担当者の県外派遣など、情報収集を徹底し分析を尽くす。
国体にかかわる各部門担当者の研修が、自弁で深夜まで続くこと度々であった。

みごと総合優勝を飾る

- 成年女子（平山満監督）、少年女子（川口志津雄監督）が優勝。成年男子（増井大四郎監督）、少年男子（河野宏二監督）が準優勝。総合優勝と女子総合優勝を手に入れる。
- 身障者大会が鳥取市で開かれる。皇太子殿下・同妃殿下のご臨席を賜り、大会役員に励ましのお言葉をいただき、関係者一同精一杯の力を発揮できた。

1986年（昭和61年）

- 第二代理事長の尾坂寛人が39年間の任を勇退。和田哲昭が新理事長に選出された。

- 森田隆朝会長は、日本協会ドクター委員会副委員長に就任。
- 審判員のプロテクターにインサイドプロテクターの採用、審判員・捕手のマスクにスロートガードの装着が義務付け、審判員のジャッジにISF型の採用が決定。同時に延長9回同点時のタイブレークルールを導入。
- 成年男子は、第41回山梨国体で地元山梨に敗れたが準優勝。成年女子は元ナショナルクラブを中心とした鳥取ファストクラブが第7回全日本クラブ女子選手権大会でベスト4に進出した。
- 里見尊子（倉吉産高→日体大）が、大学選手としてはただ一人国際選抜チームに選ばれ、ジャパンカップ国際大会で活躍した。
- 公認指導者制度がスタートし、中国地区の認定講習会で和田哲昭・権代真廣・岡本純朗が取得。
- 第21回全国高校男子選手権大会が米子市で開かれる。

1987年（昭和62年）

- 里見尊子は更に、第3回世界ジュニア選手権大会に副主将として参加し第3位、国際女子選手権大会では準優勝の原動力となった。
- 成年男子の稲毛靖投手はジャパンカップ国際大会に参加し2位となった。
- 石田紙器クラブが、第33回全日本一般男子大会ベスト4進出。
- 鳥取ファーストクラブが、第8回全日本クラブ女子選手権大会ベスト8進出。
- 日本女子リーグ2部大会第1節が淀江町で開かれる。

1988年（昭和63年）

- 森田隆朝会長は、日本協会ドクター委員会委員長に就任。
- 権代真廣は日本協会の総務委員に中国地区代表として参加。
- 出西弘道審判委員長は、県協会2人目の国際審判員資格を取得。
- 石田紙器クラブが、全日本クラブ男子大会でベスト4進出、京都国体では鳥取県選抜として準優勝。その後社内事情で解散、鳥取打吹クラブとして再編成。
- 第1回全国健康福祉祭の全国高齢者ソフトボール大会に、米子市から選手を集め参加。

1989年（平成元年）

- 第1回県指導者認定講習会を開く。約100名の指導者・チーム関係者が受講。
- 第11回全国中学校女子・第4回全国中学校男子大会が米子市・淀江町で開かれる。全中開催に合わせて男子チームが誕生する。淀江中学校を先頭に米子・倉吉にも誕生。

1991年（平成3年）

鳥取打吹クラブ（山本清人監督）が、石川国体で成年男子の部準優勝。

1992年（平成4年）

- 国体等を大成功に導いた森田隆朝会長が勇退、後に米子市長となる。岡田端（県教育委員・会社経営）が会長に就任。新理事長に権代真廣、事務局長に河津主明を選出した。
- 鳥取打吹クラブが、山形国体で第3位。
- 女子リーグ西日本3部大会が倉吉市で開かれる。

1994年（平成6年）

鳥取市にソフトボール専用球場を含む倉田スポーツ広場が造成された。

1995年（平成7年）

全国高校総合体育大会の男子大会が淀江町・米子市で開かれる。

1996年（平成8年）

指導者には（財）日本体育協会公認スポーツ指導員資格の取得が必須化する。日ソ指導者資格の文部省認定「社会体育指導者の知識・技能審査事業」の「地域スポーツ指導者」への移行が認められ、以後、移行講習会が向こう3年間を目途に実施することとなる。

1997年（平成9年）

- 日本女子リーグ1部最終節が米子市制70周年記念事業として米子市民球場で開かれる。アトランタオリンピックで活躍した日本ナショナルチームのメンバーが多数出場。県内初の有料ゲームだったが、両日とも多数の観客でにぎわった。
- 米子わかとりレディース（井本洋子監督）第10回全国スポレク祭沖縄でパート別で初優勝。

1998年（平成10年）

- 第30回西日本大学選手権大会が米子市・大山町で開かれる。
- 第2回西日本シニアソフトボール大会が新設の鳥取市倉田スポーツ広場で開かれ、この会場での大会誘致に希望が持てた。
- この頃より、中国大会以上の大会にあたっては、正規の広さを持ち、フェンスで球場を囲むことが条件となる。

1999年（平成11年）

- 指導者資格取得のための移行講習会により30名が移行を完了。この後、新たに日体協の指導者資格を取るか、準指導員（日ソ公認指導者）の資格を取得することがチーム監督の必要条件となる。
- 本県では唯一のブロック大会、全日本総合男女中国予選会を米子市で開催し、日本リーグ所属の強豪を含む男女14チームがハイレベルの熱戦を展開した。地元の男子鳥取打吹クラブと女子鳥取短大の両チームが揃って代表決定戦を制し、全国大会出場権を獲得した。
- この年の最大のイベントは、昭和24年に鳥取県協会が創立してからの輝かしい50周年という大きな節目を迎え、記念事業を開催したことであった。

半世紀の足跡をまとめ、新しい時代につなぐ大きな事業である。限られた経費と時間そして少ないスタッフで準備委員会を構成し、関係者には大変な苦勞があった。特に記念誌の編集については、資料が散逸しており記憶も長い年月で薄れ、編集作業に正確を期するには実に多くの困難を伴った。

記念式典と祝賀会は12月19日米子市内のホテルで開かれ、関係者約100人が節目を祝った。式典では岡田会長が「わかとり国体、日本リーグ開催と色々な思い出がある。それぞれの歴史を顧み次の代につなぐのが大切。」とあいさつ。権代理事長が協会の50年のあゆみを披露した後、ソフトボールの普及発展に功績があった役員、指導者等が表彰され、引き続き祝賀会が盛大に開かれた。

- 山陰地方における生涯スポーツの底辺拡大を目的とした、鳥取・島根両県協会共催の第1回山陰レディース大会が、6チームの参加を得て米子市で開催され、優勝ハイブリッド、準優勝米子わかとりレディースと地元2チームが表彰された。

第 23 回中国高校男子選手権大会 米子商 (現米子松蔭) ベスト 4
一回戦 3-0 高梁 (岡山) 準決勝 1-2 尾道 (広島)

第 34 回全日本大学女子選手権大会 鳥取女子短大
一回戦 3-0 日本大 二回戦 0-5 中京大

第 54 回国民体育大会 少年男子 一回戦 0-6 大阪

(財)日本体育協会公認上級スポーツ指導員養成講習会 東京都
和田哲昭 権代真廣 稲毛靖 田村嘉庸

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

森田隆朝

(財)鳥取県体育協会 体育功労賞

和田哲昭

平田尚伸審判委員長 日本女子リーグ派遣審判員採用

2000 年 (平成 12 年)

○ 前年は県ソ協創立 50 周年記念を盛大に祝福した思い出深い一年であった。年が明けてこの年のソフトボール界は、シドニーオリンピックにおける日本女子チームの大活躍で、待望の銀メダル獲得により国民に大きな夢と感動を与えてくれた。

○ 県ソ協では、年々厳しくなる財政面を考慮して規約内規の一部を改正し、一般男女に関する県大会の参加料を 1 万円に値上げして大会運営の一助とした。

○ 県協会主管の大会は、全日本大学男女中国予選会、国体中国ブロック大会、中国一般男子選手権大会、全日本高校選抜中国予選会。

第 55 回国民体育大会 (富山県) 中国代表 成年男子県選抜 3 年ぶり

会長、理事長、事務局長が激励に駆けつけ期待されたが、初戦で強豪千葉県と対戦し不運もあり 0-1 で惜敗した。

第 35 回全日本大学女子選手権大会 中国代表 鳥取女子短大

一回戦 21-1 信州大 二回戦 0-12 日本体育大

第 21 回全日本クラブ男子選手権大会 中国代表 鳥取打吹ソフトボールクラブ

一回戦 6-4 大牟田記念病院 (福岡) 二回戦 7-11 香川興産

第 13 回全国スポーツレクリエーション祭 米子わかとりレディース (3 回目)

予選リーグ 3-2 京都チャリーズ 2-5 松任朝顔クラブ (石川)

3 チーム 1 勝 1 敗同率 抽選結果決勝進出ならず

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

岡田 端 出西弘道 田中朗博

2001 年 (平成 13 年)

○ 激動の 20 世紀から新時代の 21 世紀を迎えた。第 54 回全日本総合女子選手権大会の開催を翌年に控えた県ソ協は、その準備に明け暮れた 1 年であった。

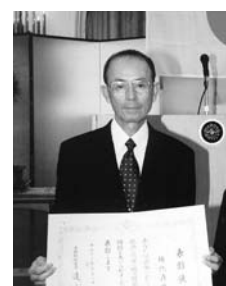
大会の誘致に当たっては、平成 9 年の秋に米子市制 70 周年記念行事の一環として開催した日本女子リーグ (一部) 米子大会を無事終えた直後、森田米子市長の「平々凡々たる人生にあ

って時には強烈な刺激が必要である、もう一度日本女子のトップスターが集う大会を呼び熱狂乱舞したい。」との一言に権代真廣理事長が「それでは次の75周年には全日本総合女子でも受けましょうか・・・」と軽い気持ちで返答したのが次第に本気になって進展し、国内最大規模の権威と伝統のある全日本総合女子選手権大会を誘致することになった。

それからが大変で、種々の難題に直面しながら、市長自らの先頭に立ってのバックアップと関係者の努力が実を結び、前年難産の未開催地に正式決定した。主管協会として、日本のトップレベルの力と技、世界に通用するプレーの競演を生で運営できる絶好の機会であり、総力の結集で遠来の選手が満足できる最高の舞台を整え、生涯の思い出になる大会にするため関係者には多忙な日々が続いた。

○ 県内でのメイン大会は、全日本クラブ男女中国予選会と、年明けの2月、中国ブロック審判・記録員伝達研修会が米子市で開催された。

○ この年、県協会にとって慶祝すべきこととして権代真廣理事長が「平成13年度体育功労者」として文部科学大臣表彰を受賞、表彰式は東京都のホテルで行われた。



権代真廣氏

第53回全日本高校女子選手権大会 鳥取女子（現鳥取敬愛）
一回戦 2-1 梓川（長野） 二回戦 0-20 熊本国府

第36回全日本高校男子選手権大会 由良育英（現鳥取中央育英）ベスト16
一回戦 4-3 光明学園相模原（神奈川）

二回戦 3-0 広島工大
三回戦 1-7 箕島（和歌山）

第25回中国高校男子選手権大会 由良育英 準優勝
一回戦 8-4 安来（島根）
準決勝 8-4 広島工大
決勝 4-10 高梁（岡山）



由良育英男子

第15回全日本シニア大会 シニア伯耆クラブ
二回戦 5-1 城下シニアクラブ（長野県） 三回戦 0-6 CSC 熊本

第14回全国健康福祉祭（ねんりんピック2001広島） シニア鳥城クラブ
一回戦 4-4 富山となみ（抽選勝） 二回戦 1-2 愛知稲沢

財日本ソフトボール協会支部功労者表彰
吹野 新 横山忠男

2002年（平成14年）

- 役員改選により長年本県ソフトボール協会の振興発展にリーダーとして尽力した岡田端会長の勇退により後任に斉木正一副会長が第4代会長に就任、新体制がスタートした。
- アトランタからシドニーと着実に実力をつけてきた日本女子チームの大活躍は、日本列島に

感動と興奮のドラマを残し、国際的にも注目されるようになった。このオリンピック効果で追い風に乗っている時、本県では、初めての**全日本総合女子選手権大会**が9月、米子市制75周年を記念して米子市民球場を主会場に、この春に全面改修で整備された市営米子東山スポーツ広場と淀江野球場の4会場で、全国からのオリンピック選手を含む強豪32チームが一堂に会し熱戦を繰り広げた。大会前日、秋晴れに恵まれた米子市民球場での開会式では、元会長でもある森田隆朝米子市長のユーモアたっぷりの歓迎の言葉が述べられ、緊張気味の選手達に笑顔を誘った。残念ながら本県のチームは中国予選で敗退し出場はかなわなかった。

大会の初日、午後から雨模様となり、試合中断を繰り返しながら役員総出のグラウンド整備により決行、4会場とも最終試合は全てナイトゲームとなり、8時頃ようやく初日の全日程を終えた。

地元テレビ局の再三の放映が功を奏し、連日多くの観客が詰めかけ、最終日の決勝戦、日立高崎対ミキハウス戦は約3500人ものファンでスタンドは大声援に包まれた。当地ではめったに生で見ることの出来ない、日本を代表するトップレベルの生きた投、攻、守とスピード感溢れるプレーの続出で観客を魅了した。

全国最小の県で、この大事業を大成功に終わることが出来たのは、鳥取県、米子市および淀江町をはじめ、県協会の総力の結集で、寝食を忘れての大奮闘があったからであった。多くの選手から、「雨が降った後のグラウンド状態が良く、試合がやりやすかった。」「水とご飯がとてもおいしかった。」などの声が聞かれ、大会運営に携わった方々の苦勞が報われた思いであった。

○ 県協会主管の大会は、中国高校男女選手権大会、全日本教員中国予選会、全日本大学男女中国予選会。

第37回全日本大学女子選手権大会 中国代表 鳥取短大 2年ぶり21回目
一回戦 0-3 仙台大

第21回全国高校選抜(男子)大会 由良育英
一回戦 3-2 松山工(愛媛) 二回戦 0-7 日向工(宮崎)

第21回全国高校選抜(女子)大会 鳥取女子
一回戦 2-1 神戸野田(兵庫) 二回戦 0-12 神村学園(鹿児島)

第51回中国高校女子選手権 鳥取女子 ベスト4
一回戦 8-1 市立広島商 二回戦 3-2 倉敷中央(岡山)
準決勝 0-9 安田女子(広島)

第15回全国スポーツレクリエーション祭 米子わかとりレディース(井本洋子監督)4回目
ブロック優勝2回目予選リーグ
1-8 タートルズ(福岡)
3-0 川越レディース(埼玉)
準決勝 7-0 宇都宮クラブ(栃木)
決勝 4-1 岐阜ヤンキーズ



(財)日本体育協会公認C級

スポーツ指導者養成講習会
(専門科目)

米子わかとりレディース 応援してくれた地元少年チームと共

12月8日～1月19日 40時間 倉吉^に19名

2002・10 東広島市

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

福澤美恵子 平田尚伸

2003年(平成15年)

- 前年に開催した全日本総合女子選手権大会の興奮と感動のドラマが未だ冷めやらぬ平成15年度は、全国クラスの行事はなく、県協会主管の大会は全日本中国地区予選会として実業団男子、大学男女、視覚障害者の3大会と、済生会中国大会が開催された。
- 岡山県で開催された第49回全日本総合男子中国予選会の第3代表決定戦、鳥取打吹ソフトボールクラブ 対 生田部屋戦が雨天延期となり、岡山県協会より後日鳥取で行ってほしい旨の依頼を受け鳥取市で実施した結果、鳥取打吹クが代表権を得た。
- この近年、登録チームをはじめ各種資格者の減少傾向の中、一人でも多くの人にソフトボールの魅力を知ってもらうためにも、審判員、記録員、指導者を育成し有資格者の増員に務め、ソフトボール人口の拡充を図ることが県協会にとって重要な課題となった。
- 年明けの2月7日、平成15年度ソフトボール中・高一貫指導者講習会が、田中大鉄氏(日本リーグ1部豊田自動織機女子ソフトボ一部監督)を講師に招き、米子で開催された。これは、ジュニアクラブ指導者と中学・高校の指導者が一堂に会し、指導方針や発育段階に応じた強化方法等について共通理解を図り、効果的な競技力向上を目指す目的で、県内の各地から多数の受講者が詰めかけた。

第38回全日本大学女子選手権大会 中国代表 鳥取短大 2年連続22回目

一回戦 1-5 国士舘大

第49回全日本総合男子選手権大会 中国代表 鳥取打吹ソフトボールクラブ

一回戦 1-14 大阪グローバル

第21回全国高等学校男子選抜大会 由良育英

一回戦 3-2 松山工(愛媛) 8回タイブレイク 二回戦 0-7 日向工(宮崎)

第52回中国高等学校選手権大会 鳥取敬愛

一回戦 6-0 岡山東商 二回戦 2-3 鈴峯女子(広島)

第16回全国健康福祉祭(ねんりんピック2003 徳島) シニア伯耆クラブ

一回戦 3-1 宇佐市(大分) 二回戦 2-6 仙台SS(宮城)

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

吉田 隆 井本洋子

2004年(平成16年)

- オリンピックイヤーで「金メダルしかない」と期待の大きかった日本女子チームは残念ながら銅メダルに終わり、協会サイドでは悔いるが一般社会では結構高



く評価された。

第4回全日本中学生男子大会

後藤ヶ丘クラブ（玉野伸也監督）

初出場 ベスト4

一回戦 7-3 上勝クラブ（徳島）

二回戦 第1回大会優勝の安富祖クラブ（沖

縄）と対戦、追いつ追われつの大接戦の末、4-4の同点で抽選の勝利。

準決勝戦は、第1回大会準優勝の吾北クラブ（高知）と対戦、初回に打者13人の猛攻撃を受け序盤で9点を奪われて3-15の大差で力尽き、決勝進出の夢は阻まれた。

第39回全日本大学女子選手権大会 中国代表 鳥取短大 3年連続23回目

一回戦 1-3 新島短大（群馬）

第25回全日本クラブ男子選手権大会 中国代表 鳥取打吹ソフトボールクラブ

一回戦 4-5 取手インディアンズ（茨城県）

第50回全日本総合男子選手権大会 中国代表 鳥取打吹ソフトボールクラブ

一回戦 0-3 デンソー（愛知県） 9回タイブレイク

第59回国民体育大会（成年男子） 中国代表 鳥取県選抜

一回戦 0-1 愛媛県選抜

第23回全国高校女子選抜大会 中国代表 鳥取敬愛

一回戦 0-1 門前（石川）

以上の中でも、国民体育大会に4年ぶりの出場を果たした成年男子は、わずか1本塁打に泣いたがその試合内容では十分入賞する力が証明された。

第17回全国スポーツレクリエーション祭 米子わかとりレディース（5回目）

予選リーグ 1-8 吉島アップルズ（富山） 9-8 利根ミックス（群馬）

準決勝 1-17 裾野シスターズ（静岡）

第18回全日本シニア大会 鳥取砂丘シニアクラブ

一回戦 7-0 上牧町シニアクラブ（奈良）

二回戦 0-11 福岡クラブ

○ 県協会主管の大会は、第13回西日本実年大会、第36回西日本大学男女選手権大会、第58回国体中国ブロック大会、第50回男子・第56回女子の全国全日本総合中国予選会、第39回全日本大学男女中国予選会、第26回全国中学校男女中国予選会等、数多くの大会が続き、関係者の皆様には苦勞が多いシーズンであった。

(財)日本体育協会公認C級スポーツ指導者養成講習会（専門科目）

12月19日～2月20日 40時間 倉吉 21名

(財)日本ソフトボール協会支部功勞者表彰

山田和夫

2005年（平成17年）

○ 全国スポレク祭の開催を来年に控え、この年度はその準備に多忙な年であったといえる。

本県では昭和60年（1985年）わかとり国体を契機に、スポーツ施設を整え競技運営のノウハウを身につけ、10年くらいのスパンで大イベントを開催し、本県スポーツ人口の拡大と振興を図ってきた。それが、平成7年（1995年）の全国高校総体そして平成18年（2006年）の全

国スポレク祭であった。

スポレク祭は都道府県代表種目の女子ソフトボールで、競技が3日間、選手は30歳以上、全国から48チーム、960名が参加する。会場は米子市内に8会場の設営が必要である。この年はその大会のリハーサルとして秋の県民スポレク祭を米子市で開催し、審判員、記録員、放送員等の研修と連携を密にした。大会運営全般について最終確認をすることが出来た。

しかし、何と云っても全国最小県でスタッフが小規模の県協会では、競技役員の高齢化に伴い絶対数確保に頭を痛め、いくつかの課題が残った。そんな中で、本番までの僅かな期間を最大限活用して行政サイドと協調し、悔いの残らないよう万全の体制で全国の皆さんをお迎えし、生涯のよき思い出

なる大会にしなければならなかった。

第52回全国総合男子選手権大会

中国代表 鳥取打吹ソフトボールクラブ
一回戦 0-2レッツジト(大阪)

第54回中国高校女子選手権大会

鳥取敬愛 (平田尚伸監督)

11年ぶり3回目の優勝

一回戦 7-0 鈴峯女子(広島)

二回戦 3-1 中村女子(山口)

準決勝戦 5-3 岡山東商

決勝 2-0 津山商(岡山)

同大会同時出場 米子松蔭

一回戦 7-6 出雲商(島根)

二回戦 1-5 倉敷中央(岡山)

同大会同時出場 鳥取中央育英

一回戦 8-1 下関短大付属(山口)

二回戦 0-4 津山商

第29回中国高校男子選手権大会 鳥取中央育英 ベスト4

二回戦 1-0 東岡山工

準決勝 3-4 御調(広島)

第18回全国スポーツレクリエーション祭 米子フレンズ(全県補強)

予選リーグ 3-3 スカイズ(茨城)

6-5 NSC(福井)

準決勝 0-16 東海ウイングス(愛知)

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

長坂則翁

上山明輝



鳥取敬愛 2005・5 呉市

2006年(平成18年)

○ この年は、本県ソフトボール協会の総力を結集して取り組んできた生涯スポーツの祭典「スポレク鳥取2006」女子ソフトボール大会が、予定通り数々の感動のドラマを残しながら、所期の目的を果たし成功裡に終了することが出来た。

9月21日午後、西部地区各市町村で開催される女子ソフトボールを含む競技の総合開会式が米子コンベンションホールで行われ、郷土芸能等を披露し、会場は終始なごやかなうちに拍手や歓声に包まれた。

翌22日8時30分、秋晴れの米子市民球場で、全国から30歳以上の女性達48チームの監督、選手をお迎えして開会式が盛大に行われ、引き続き淀江会場を含めた8球場で熱戦がスタートした。そして、この日の夕方6時からみんなが待ち望んでいた歓迎レセプションが全チーム参加（約700名）で米子コンベンションセンター大ホールに於いて開催された。

米子市職員によるユーモアを交えたプロ顔負けの司会進行により、遠来の選手とともに歌と踊りで最高に盛り上がり、にぎやかに交流を深めるひとときを過ごした。来賓の野坂米子市長も熟年女性パワーの凄さに驚かれた様子であった。

大会には本県から米子わかとりレディース、HIROSHI、ハイブリッド、育英フレンズ、鳥取クローバーズの5チーム出場した中で、ハイブリッドは予選リーグ、PAL(青森)0-0抽選勝ち、河合クラブ(奈良)7-6で決勝トーナメントに進出したが、準決勝で3-8川口マスターズ(埼玉)に敗退した。特に米子わかとりレディース(井本洋子監督)は予選リーグ、7-1イナ昂(長野)、11-1具志川ピンクパーサー(沖縄)、準決勝1-1新南クラブ(和歌山)抽選勝ち、決勝7-0相馬レディース(福島)、4戦全勝で見事ブロック優勝(3回目)に輝き、スポレク賞を受賞した。



米子わかとりレディース 淀江町

多くの参加者がソフトボールを通じて交流の輪を広げ、夢と勇気を心にきざみ、予想以上の成果を挙げた素晴らしい大会であった。なお、この大会の開催にあたり長年の準備から残務整理まで多大なご尽力をいただいた関係者に深く感謝と敬意を表したい。今後もこの祭典が一過性のイベントで終わることなく、生涯スポーツの更なる普及振興につながることを期待する。

- これに合わせて、長年の懸案であった鳥取県ソフトボール協会旗を50数年ぶりに新調し、スポレク祭に花を添えた。
- さらに慶祝すべきこととして、和田哲昭副会長が春の叙勲で、瑞宝双光賞受賞の栄に浴され、東京国立劇場に於いて勲記・勲章の伝達を受けた。
- その他の県協会主管大会は、全日本クラブ選手権中国予選会。

第41回全国大学女子選手権大会 中国代表 鳥取短大 2年ぶり24回目

一回戦 1-6中京大

第58回全日本高校女子選手権 鳥取敬愛

一回戦 4-1市立習志野(千葉) 二回戦 4-10滋賀学園

第55回中国一般男子選手権大会 北陽ソフトボールクラブ 準優勝

一回戦 10-0浜田シーマンズ(島根) 二回戦 7-6新見城山クラブ(岡山)

準決勝 5-1宇部興産(山口) 決勝 0-7ウエダバッファロー(広島)

同大会同時出場 米子マックス ベスト4

一回戦 8-0御津ク(岡山) 二回戦 5-4金江ク(広島)

準決勝 0-10ウエダバッファロー(広島)

第30回中国高校男子選手権大会 鳥取中央育英 ベスト4
 一回戦 5-1 浜田(島根) 二回戦 2-5 御調(広島)

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

麴谷昭久 山崎敬男 角 末廣

2007年(平成19年)

○ 昨年秋、成功裡に終了した全国スポレク祭女子ソフトボール大会の余韻が残る中、第59回全国高校女子選手権大会に米子松蔭(福田敦子監督)が、初のベスト8に進出し5位入賞を果たし、長らく低迷気味の高校勢に明るい話題を提供してくれた。

○ さらに、秋の第56回中国一般男子選手権大会で鳥取打吹ソフトボールクラブが山陽勢の強豪に打ち勝ち堂々の初優勝を飾る素晴らしい活躍を見せた。



米子松蔭女子 2007・8 佐賀県

○ 反面、国民体育大会には縁遠く、この年も全種別ともブロック大会を突破できず、これで岡山、兵庫、秋田と3年間本大会から遠ざかり、県協会とて今一步の競技力強化が課題となってきた。

○ 県協会主管の大会は、中国高校男女選手権大会、全日本大学男女中国予選会。

第31回中国高校男子選手権大会 鳥取中央育英 ベスト4
 二回戦 5-4 安来(島根) 準決勝 0-2 新見(岡山)

第59回全国高校女子選手権大会 米子松蔭 ベスト8
 一回戦 2-1 弘前聖愛(青森)

二回戦 1-0 三国(福井)
 準々決勝 0-6 星野女子(埼玉)

第56回中国一般男子選手権大会

鳥取打吹ソフトボールクラブ

(足羽進一監督) 初優勝

一回戦 7-0 帝人(山口)

二回戦 3-2 ウェガハッファー(広島)



鳥取打吹ソフトボールクラブ 下関市

準決勝 16-5 宇部興産(山口)

決勝 6-3 三菱重工広島

第31回中国中学校選手権大会(男子の部)

淀江中(田中朗博監督・高塚正巳コーチ)

準優勝

一回戦 3-1 岡山後楽館



準決勝 10－3 琴浦（岡山）

決勝 0－5 新見第一（岡山）

第11回西日本シニア大会

鳥取砂丘シニアクラブ

淀江中男子 2007・7 岡山県美咲

一回戦 14－8 西原クラブ（沖縄） 二回戦 0－10 山口クラブ

(財)日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会（専門科目）

11月25日～1月20日 40時間 倉吉 19名

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

稲毛 靖 宮脇照子

2008年（平成20年）

- 本県協会の役員改選の年度で、特に権代真廣理事長は、16年の長きにわたり要職を務め、数々の全国大会を誘致し成功するなど多くの功績を残してきたが勇退し、本県協会の副会長に就任した。新理事長には出西弘道が、事務局長には伊藤泰博が就任した。
- 北京オリンピックで悲願の金メダルを女子日本代表チームが獲得した。このことが、次回のロンドンで正式種目から消えていく運命にあるところ、日本協会の旗振りにより“Back Softball 2016”の機運を高める運動が、2016年開催地の東京招致運動と合わせて日本全国を駆け巡ることとなった。同時に日本協会は、ヨーロッパ、アフリカを重点に普及宣伝活動に総力を傾注した。
- 県協会主管の大会は、全日本大学男女中国予選会、中国中学校男女選手権、中四国盲学校大会（グランドソフトボール）。

第58回中国高校女子選手権大会 米子松蔭 ベスト4

一回戦 4－0 松江商（島根） 二回戦 8－1 清水が丘（広島）

準決勝 4－5 高川学園（山口）

第22回全日本シニア大会 シニア伯耆クラブ

一回戦 5－1 足利西小（栃木） 二回戦 3－6 名古屋シニア（愛知）

第3回全日本ハイシニア大会 ハイシニア伯耆

二回戦 5－3 清水九十九（静岡） 三回戦 1－12 下関クラブ（山口）

ねんりんピック鹿児島2008 鳥取砂丘シニアクラブ

一回戦 0－0 各務原クラブ（岐阜）抽選勝 二回戦 4－5 札幌市（北海道）

第27回全国高等学校男子選抜大会 鳥取中央育英 ベスト16

一回戦 6－2 福岡（岩手） 二回戦 6－4 伊勢原（神奈川） 三回戦 3－7 高知工

(財)日本ソフトボール協会支部功労者表彰

斉木正一 中原祥雄

2009年（平成21年）

- オリンピック 2016 を東京に招致することで、ソフトボール競技が正式種目に復活できるのではという思惑も、残念ながら両方とも夢はついていた。しかし今後も、復活のために、ソフトボールが世界で広く愛されるスポーツとして普及発展していくための努力を、日本は担わなけ

ればならないといわれている。そしてまた“Back Softball”は終わらない!!

- 日本協会主導で、将来の日本のソフトボール界をリードする優秀選手の一貫育成システムのジュニア育成中央研修、いわゆる NTS (National Training System) 中国地区選考会が、本県では初めて9月に倉吉総合産業高校を会場に、中国各県の選抜された中学生女子を一堂に集め実施された。各県の技術強化委員および中学校顧問教師の指導の下、各県からの優秀選手 50名が技術の披露と研鑽をした。その中から本県の米子市立東山中学の村端夢乃選手が全日本強化合宿のメンバーに選ばれた。
- 鳥取城北高校女子部が衝撃的なデビュー。春の中国高校県予選会に1年生だけで編成されたチームで登場し、あれよあれよの準優勝。県高校総体でも春に続いての準優勝そして新人戦でも準優勝、いずれも米子松蔭高校に惜敗であったが、今後の高校ソフトボール界に大きな一石を投じた。
- 鳥取城北高校の山科麻由佳選手が、ISF イーストン・ファンデーション・ユースワールドカップ (チェコ/プラハ、8/9~16) の女子 U16 日本代表に選ばれ出場し、金メダルを獲得した。上記の NTS によって、昨年広島県で中学生のときに日本協会のジュニア強化選手に選ばれていた。今後の本県のレベルアップに貢献することを期待する。
- 新潟国体で天皇杯最下位、本県関係者はこの不名誉を深刻に捕らえている。最小県とはいえこれまでにそれなりの成績を残してきた。特に団体競技による得点が有効である仕組みの中で、ソフトボール協会は 50 周年記念誌のとおり、何回も良い得点稼ぎで貢献している。この年の中国予選会では、4 種別の内、特に成年男子、少年女子は紙一重の実力の差で惜敗した。少年男子も今一步であった。県の関係機関と連携の上、今後の強化の取り組みに更なる工夫が望まれる。
- 県東部地区の中学生女子合同チーム「因幡飛球会」第 23 回県中学生女子選手権大会で初優勝。水石裕士監督 (東部地区協会副会長) の指導の下、東部地区中学校に刺激を与えた。
- 県協会主管の大会は、全日本大学男女中国予選会、中国盲人大会、全日本総合男女中国予選会、全国障害者中四国予選会。
- 斉木正一会長が、鳥取県議会副議長に選任される。

第 30 回全日本クラブ男子選手権大会 中国代表
鳥取打吹ソフトボールクラブ

一回戦 5 - 6 オール福岡

第 56 回全日本総合男子選手権大会 中国代表
鳥取打吹ソフトボールクラブ

一回戦 4 - 2 福島クラブ 二回戦 0 - 7 大阪桃次郎 (大阪)

第 23 回全日本シニア大会 鳥取砂丘シニアクラブ

一回戦 12 - 9 倉賀野シニア (群馬) 二回戦 12 - 8 帯広クラブ (北海道)

三回戦 4 - 7 NTT 西日本鹿児島

第 33 回中国高校男子選手権大会 鳥取中央育英 ベスト 4

二回戦 6 - 0 徳山 (山口) 準決勝 1 - 2 御調 (広島)

第 58 回中国高校女子選手権大会 米子松蔭 ベスト 4



一回戦 4 - 1 松江商 (島根) 二回戦 6 - 1 清水が丘 (広島)

準決勝 4 - 5 高川学園 (山口)

第13回西日本シニア大会 シニア伯耆クラブ

一回戦 5 - 1 中津シニア (大分) 二回戦 2 - 6 ウエルネス都城 (宮崎)

第5回西日本ハイシニア大会 ハイシニア伯耆

一回戦 2 - 1 宇多津レッドスターズ (香川) 二回戦 1 - 2 荒尾トトラーズ (熊本)

第22回全国健康福祉祭 (ねんりんピック 2009 札幌) シニア鳥城クラブ

一回戦 10 - 9 北海道 二回戦 7 - 7 福岡 (抽選勝ち)

三回戦 3 - 3 埼玉 (抽選負け)

指導者対象講習会

有資格者不在のチームの公式大会への出場を可能にする為の暫定の措置 (単年度有効)

9月5日 7時間 倉吉 8名